



アラン

ーノルマンディー人  
のプロポIII (完)  
【2014年6月号】

翻訳：高村昌憲

三歳か四歳の少女が、食事制限をしていました。彼女は穀物のスープしか口にしませんでした。マカロニのゆで汁しか食べませんでした。そして更に良く体重が量られて色々と制限されていました。少女は何時も空腹で、がつがつ食べました。そのことが教えてくれることは、如何に極端な節食をしても、食べる喜びは決して失わないことです。空腹になればパンやチーズの前では誰も手を出したくなります。少女がマカロニのゆで汁を食べる時の喜びも理解されます。

しかし、それらの喜びが非常に長く待たされると、思いが募ります。お腹の肉が盛り上がったアッシリア王のサンダナパロスは、先ず大変ゆっくりと食べる練習をします。そして食べるべきものを瞑想して味わいます。想像して食べるのは、一度では食べないで何度も何度も食べるためです。もしもそんなことが良くあったなら、驚くべき理油から少女なら或る日全く食べるのを拒否するでしょう。「私は皿の中を見たくない」のです。古代ギリシアの哲学者エピクロスは、一切れのパンと二、三個の無花果と共に、藁の上で高尚になりました。彼も又太るのを恐れ、皿の中を見るのを恐れました。

この種の行為は、けちんぼを解明しています。というのも、もしもそれが欲のない人間でしかないとすれば、守銭奴のようにけちでしかないからです。彼にはグランデ親父の才能はありません。恐らく吝嗇には詩があります。想像力の華麗さがあります。私はやがて消費します。欲しいと思った時に遣えるように十分にお金持ちになった時に、私は消費します。少なくとも十分なお金持ちと思うには、財産を計算しなかつたり物の値段に無知であつたりしてはなりません。あるいは余り欲があつてもなりません。もしも帝国のようなものを望み、そして大異変もなければ、何時までも繰り返されることでしょう。この様にして希望によって、習慣となる年齢までけちになろうとするのです。物事の中でお金が与えてくれるこの種の力を考えてみましょう。そして、それは害があるのではなく、豊かにしてくれます。

結局のところ経験から十分に分かることは、最も簡潔な人生は最も永続性のある喜びを与えてくれることです。現代のけちんぼは、小鳥のズアオホオジロと同じ位にチーズが好きです。そして彼の胃は丈夫です。それ故に、もしも貧乏になって想像の中でしかお金持ちになれなかったとしても、恐らく彼はそんなにも愚かになることは決してないでしょう。貧乏人たちは、権力の亡霊を手に入れるために、お金持ちの外見を持つと努めるのを私は良く見ます。しかし、けちんぼはそんなことをしません。彼は知っているのです。彼は本当の権力を自分の指で感じているのです。彼は真摯な意見に耳を鳴らせているのです。全ての夢が望まれるや否や、実現して行きます。彼は待つことが出来るのです。

それ故に、私は本当のお金持ちの人々のうちに、少しばかりのけちを見ても何時も決して驚きません。あるいは彼らは狂っているのかもしれない。しかし、もしも理性に何らかの力があつたなら、多分贅沢をしないお金持ちが理解されることでしょう。私たち全員のために彼らは節約します。その時のお金持ちの女性は、少なくとも貧乏人に圧力をかけることはないように私には見えます。

(一九一〇年十月二九日)

昨日、友人が私に言いました、「正義とは平等でなければならないが、それは未だはつきりと分からないと言わざるを得ない。何故なら交通巡査は不平等を防ぐためにいるのは本当だが、彼には服従すべき上司たちがいるのも本当であるからだ。彼は人よりも優れた知性、注意力、決断力、誠実さ、そして勇気を示さない限り、偉くはなれない。つまり生まれつきの利点が、社会的状況の利点を与えているのである。それは最早平等ではない。しかしながら警官は極めて公平である。従って公平はこの場合、警官の間では同時に不公平になり、市民の間では平等になっているのだ」。

私は彼に言いました、「一方は他方がなければ決して分かりません。国家は常に最良を選択しなければなりません。その中で平等を行き渡らせるために、階級制度を確立させているに違いありません。ここでの階級制度は一つの方法でしかありません。平等が目的です。裁判官は、裁判を受ける人々が裁判官の前では平等でなければならないために、裁判を受ける人々よりも力があります。この不平等は、限定された機能の中にしかないと改めて言わなければなりません。法服や法廷は除かれますが、裁判官もあなたや私と同じように税金を払います。そして警官はその税金を大変に良く循環させているのです。何であろうと不公平であってはなりません。そして正義は何時も平等です」。

彼は言いました、「私はその点については大目に見る。正義が平等であることは私も認める。しかしお尋ねするが、平等を望まなければならないとか、正義を望まなければならないことを、私に証明して欲しい」。

人は返答に窮するかもしれません。プラトンの『国家』の中のソクラテスのように切り抜けられるかもしれませんが、確かに鋭敏さが必要です。学校では何をするのでしょうか。私たちは哲学を一時的にも単純化できる、と私は信じています。何故なら私たちは、そこに大変に強い共通した感情を感じるからです。学校は幾つもの事例に晒されて目覚めます。或る子供が学校で一番良い待遇を受けるのは不公平です。何故ならその子供は他の誰よりも裕福であるからです。製粉業者が君主に対して弁解出来ないのは不公平です。最も強い子供が、最も弱い子供の物を奪うのも不公平です。「この帽子は僕のだ」と言います。正義を心酔することは、殆ど全ての者の心の中にあります。それ故にもしもそれが、根拠があって興味とか恐れに寄り道するなら、それらは討論するには良い問題になります。しかし、直ぐにそこへ飛び込むのは必要なことではありません。

何か証明不可能な主張は、何時も良くしなければなりません。例えば狂気よりも理性あることの方が良いように、そして奴隷であることに満足しないで、まるでお腹一杯食べた方が良いでしょう。正義には美があります。海の美しさのように心が敏感になるものです。繊細なこの友人は大変に上手く推論し、正義のために自分を殺していました。人は眠れば、この感情に目覚めることが出来るでしょう。人は思っている以上に知性を身に付けることが出来ます。それは大変に重要なことですが、結局のところ最悪の場合、全てを証明するのは不可能です。その意味に

おいて全ての揺るぎない良心には、何か宗教的なものがあります。何故そのことを言わないのでしょうか。

(一九一〇年十一月四日)

私はローマ人たちの予言の物語を読みました。彼らには鳥を観察する司祭や、戦死者の心の奥底を見る他の司祭もありました。同様に、占星術師も星々や惑星や月を窺って見ていました。そこに未来を見る人々は、全ての人々が大金を払っていましたが、名誉ある人はそういうことをしませんでした。でも未来を見る人々をそんなにも早合点して笑ってはなりません。何よりも現代にも夢遊病者はいるからです。そしてこれらの迷信にも、ほんの小さな真実の粒があったからです。それは大空を観察した時に、四季の巡りや日食や月食を知らせることが出来ます。これらの予言は確かめられ、想像力を掻き立てます。その上、緻密な天文学者の仕事ぶりを何も知らない人間は、太陽の前を月が通過する日と時間を知らせることが出来ません。彼は事物のこじか分かりませんが、天体を観測する人間は珍しい事件や大変に恐ろしいことを事前に知っていることとなります。有名な人々の死やペストや戦争のようなことも、知らせることが出来ると信じざるを得ません。予言が当たるとその外の沢山のことに影響を与え、一つの事件の後に想像されることも当たると思われます。それ故に天文学者は占星術師に昇進しますが、彼はそれを望むか望まないかが問題です。人々が戦争か平和かの問題を望む時、あるいはティベリウスがそれを望む時、天体に相談することを何故拒むのでしょうか。

鳥も同じです。移住する鳥たちを観察することは、寒さの前振れとか春の訪れを知らせることが出来ます。既に今日、もしも燕が大地を掠めて飛べば、大概雨が降ります。しかしその理由は良く分かりません。以上の考えから鳥たちをもっと観察すれば、何でも予言することが出来るようになります。狩で殺された動物たちも同じです。動物の腹を裂けば、何を食べていたのか、あるいは水を飲んでいただのが分かります。そのことから昔は、泉や牧草地を探すのに役立ちました。これらの目印や事物の連鎖を少しも推理しなかった者たちは、未来の重要なことまで何でも動物の肝臓や胃の中に読もうとすることを望みました。

これらの全ての観察者たちは判断する人でもあったとつけ加えましょう。彼らの周りの人間的事柄も見ながら、人々にせかされて、平和や戦争についても最良と思われた忠告を与えていたのです。結局のところ観察することを一番良く知っている者は、未来を一番良く知らせられたのは本当であるのに変わりありません。

カナリヤたちが知らせてくれるからと、雨が降るのを予言していた善き女性が私の知り合いにおります。彼女は言いました、「カナリヤたちが水をひっくり返したのです。雨になるでしょう」。そして彼女は、殆ど間違えませんでした。私はその理由を理解することが出来ました。鳥たちの水飲み場は、屢々先が曲がった容器です。水は上部が空いた部分よりも閉じられた部分が高くなっています。鳥たちが飲むのに応じて、開かれた部分に水が入って落下して行きます。そのようにして生まれる装置を考えて下さい。それは水の気圧計です。水は半分入れた壇に残って流れますが、閉じられた部分の方が高くなっています。その壇の細長い首は自由に動く液体の中に少し差し込まれていて、水だけを空中で飲めるようになっています。そこにあるのは気圧計です。大変に繊細で、水銀よりも十三倍軽いのです。それらの気圧計が低くなった時、水も同

じメカニズムで鳥たちの水飲み場に落下し、鳥籠の中に飛び散りました。従ってこの老婆は間違  
って考えて、皆に予言しました。私はこの善き女性を無視しますが、この善き女性を馬鹿にする  
人も私は無視します。

(一九一〇年十一月七日)

社会主義者は、少なくとも夢のような良き建造物ではありません。それは現実のものに浸透しています。そして社会主義者たちの話は無駄で、何もならないように思えます。彼らの政治活動も、社会主義と反対のことをやっているように思えます。しかし物事の本質は彼らのために作用していますし、彼らよりもっと良くなっていて、疑うこともありません。

社会主義の根本的な思想は恐らく、皆に共通した救済に対しての自由では決してありません。一労働者には少しも権利がありません。何故なら彼は非常に早くから働くからで、生活費も少ししかなく、使用者と直接談判することも少なく、自分の兄弟も惨めな生活をさせるしかないからです。この推測は、もしも使用者が労働者の不幸によって幸せを手に行っているものであったなら、使用者に反対するもっと強い力になるでしょう。使用者は、貧しい人々の信じ難い失明によってしか、瞬間的にその力を試みることに出来ません。しかし貧しい人々は絶えず使用者を食べさせているのであり、保護しているのです。そしてゼネストが表明したいこととは、使用者たちの中で最も権力があって裕福な者は、もしも物を生産する全ての人々が彼を仲間に入れるのを拒否したなら、少しも生活が維持できなくなることです。これらの関係は今では道理あることとして十分に認識されていることです。そのための法律も出来ていますし、ストという一瞬のために社会を乱す危険な経験まで行う必要はありません。

ところで私たちが投げ込まれたこの思想の衝突には、注目すべきことがあります。それは社会主義の敵たちが全て社会主義者の主張を提案し、自由というものは良くないということです。そして個人や集団の権利と義務を決めなければならないのは、社会全体であるということです。反対に、闘う自由と社会全体に対して一部の人々の際限の無い権利を要求しているのは、労働組合の活動家たちや彼らの後に続く社会主義者たちです。個人主義者の陶醉は消えて、他の処へ行って仕舞いました。

使用者が店の主人で、彼の判断が正しかったとしても工場が閉鎖され、全ての仲裁と仲裁人を拒絶して「石炭商が店の主人」になることを期待していると言って、使用者の決まり文句を聞かされたのは、そんなにも昔のことではありません。その後直ぐに、それは個人的な防御のために社会の力に頼るが、個人的事柄の全ての権利を社会に与えず、憲兵の保護の元にあることを妨げたりしませんでした。奇妙な矛盾です。もしもあなたが絶対的に自由になりたいのなら、その時あなたは独自の方法で自分を守りなさい。鉄道員たちが同じことを今言っていますが、私は最も進歩的に聞きました。彼らは言います、「私たちが働くのは非常に望んでいるからです」。それ故に彼らには義務は消えてなくなっていますが、如何にして彼らは権利の力に頼れるのでしょうか。権利は社会的状況を前提にします。つまり人が大事にする何か別の相関的な権利を前提とします。何も大事なものが無い者は、如何なる権利もありません。そして社会全体を見ながら、これらの権利に均衡を探さなければならないと言うことは、最も純粋な社会主義を表明することです。従って現在は、それらの反動分子がそのことに気付くことなく社会主義者になっています。そして社会主義者たちはアナキストになっています。お互いが矛盾したことを唱えるのを妨

げない使用者たちは、当然労働者たちには拒んでいるこの絶対的な自由を持ち続けたいと思っています。そして労働者たちも同じで、全ての社会契約を投げ出して、そして宣戦布告して、平和宣言に従って取り扱われていないことに驚いています。もしもその全ての観念の繯れを解かなかったなら、仲裁人は如何にして判断するのでしょうか。

(一九一〇年十一月十日)

「道徳蔑視が支配的なのに、もっと適切に言うなら道徳蔑視がもてはやされているのに、あなたは絶望しないのでしょうか」。はい、絶望しません。本当です。私は絶望することさえも恐れませんが、もしも人が絶望したなら、何もかも分からなくなるでしょう。憤慨が松明のように道を明るくします。

全体から見れば、その要素は小さく、粉々にされ、奴隷のようです。従って人体には囚人部屋が作られています。各人が自分の場所を守ります。そしてむさぼり食われないようにして、むさぼり食います。それは上から下まで恐れで震えている以外にありません。頭から爪先までの絶えざる病気であり、死との戦いです。実際にあらゆることを行い、予測し、考えます。あらゆることを測り、解明し、同意し、そして非難します。あなたの喜びや自由による正しい給料が一度しか支払われない時、それらは脳や腕や手による哀れな細胞たちであり、それらが支払います。それらは自分で楽しむ哀れな細胞たちです。

誰もが、自分自身の裡に幾つもの反乱や悪徳という欲望や、豚とか犬以上のものに値する多くの喜びを感じていました。これらと同じ力が、真の友情の働きの中で、美德をはっきりと見直します。これらの小さな事柄が方向を定めれば、大きな事柄を創り出します。そして実際にはそれが人間の力を生むことであり、決して動物の力を仕込むものではありません。むしろ解放することです。心は憎しみよりも愛によって自由になりますし、心は何時も同じです。

これらの人間は皆、他人によって脅され、自分自身を閉じ込める限りは弱くて小さなものです。そして私は、彼らが勝ち誇った処を見ませんし、少なくとも満足している処を見ません。人間としての思考を全て殺した時、酔っ払いになることを切望するのでしょうか。あらゆる種類の酔っ払いがおりますが、それは彼らが何時も人間でありたくないこと、彼自身を見詰めたくないこと、彼の周りの人に証言を求めることに存するのです。というのも、あなたが隣人の弱さを真似する度に、あなたは一種の友人になるからです。

彼らが言うことを良く聞いて下さい。彼らは自分自身の内奥を頼りにするのでしょうか。彼らは、心の底から戦争、懲罰、死刑執行人を愛していると言うのでしょうか。そうではありません。彼らは必要なものを求めます。人間は決して人間に成ることが出来ないと言います。そしてその後直ぐに彼らが、漂着物のような何か思想の断片のようなものにしがみつくのを見ます。「この人間は多くの人間に対して孤独でした。ですから私は彼に投票したのです」。「私たちは秩序を知っています。ですから行き過ぎた公平は望んでいません」。彼らは漂っているもの全てにしがみついています。そして私は、もしも彼らが船の代わりに粗末な板しか持っていなかったなら、大いに高ぶる彼らを理解しません。

結局のところ彼らは、忘れるためにお酒を飲むように、些細な仕事に打ち込みます。良く見てご覧下さい。あなたは、彼らが公金支出の詳細では頑固なまでの正直さを見ます。少額の計算にも自分の眼をすり減らします。かくして檻の中のビーバーも、少しの泥があれば巣を作り始めました。この様に私はあらゆる人を見抜きます。彼らは各々の檻の中で最早思考せず、一種の公平

さを手本にした異常な本能の人になりたがっています。しかし、彼らを如何にして解放するのでしょうか。如何にして自分の腕を解放したのか、フェンシングの選手たちに聞いて下さい。それは拙い行為を上手に思考しながら、上手く行為することが出来るようになることなのです。

(一九一〇年十一月十七日)

## 百二十六 大変小さな町を思い出します... (JE REVOIS UNE TOUTE PETITE VILLE...)

私はブルターニュ地方の奥地にある大変小さな町を思い出します。石畳はでこぼこです。ステンドグラスの窓のある小さなホテルが一軒あります。ホテルのロビーは建物の骨組みが露呈していますが、人々はそこでダンスをします。時間は止まったように思えます。あるいは何世紀も前の時間に戻ったようです。その町の周りには丘々が続き、荒野が広がっています。生垣や土手が小さな谷を区切っています。至る所から泉が流れています。日曜日でした。娘たちは一群をなして道を進み、歌っていました。山の中腹の小径には、手に棒パンを持って真っ黒い服を着た一人の少年が、あちこち動き回っているのが見えました。彼は泉と畑と荒野を見詰めていました。

この風景を、私は重要なものとして把握しました。何故女性は連れ立っていて、何故男性は一人なのでしょう。その疑問から秘められた感情に答えようとしたのですが、何時も満足のいく原因を突き止めることが出来ませんでした。けれどもそれ以来、私が眼にした女性たちは群を成していて、男性は一人でした。概して男性は一人でいるということが多いのです。それ故、男性は女性よりも心配性であるのか、又は寂しがり屋なのでしょう。勿論これは仮定に過ぎません。人間は誰でも寂しさから逃れます。彼らブルターニュの人々は若く、喜びに溢れた眼をしていました。多分、彼らはブルターニュ人の性質である、ものを良く見ることが身に付けていて、口数は少なくて寡黙な人でした。

男性は女性よりも個人主義的であるように思います。極めて厳密に言うなら、女性は卵子を持っていますから、種の保存に重要な存在であることは確かです。子供は女性の体の一部でしたが、親から離れて生きて行きます。女性の裡には、何時までも終わりのない生命の継続があります。男性は女性よりも瞬間的存在です。或る種属の生き物たちは、雄を追い出したり殺したりします。そこから結論付けられることは多分、男性は自分自身の身体だけで満足することは少なく、恐らく何か瞑想に耽るか、我を忘れて何かの計画を立てなければなりません。私はそれを詩人や旅行者や発明家や軍人に見ます。彼らの夢は自分の周りにあります。決して自分の感情を楽しむことではありません。思考は彼の宿命です。あるいはその宿命は最早、自分の椅子に座っている悲しきアルガン<sup>(1)</sup>でしかありません。

色々なことを男性に話して下さい。彼は我を忘れて満足します。そのことに彼を連れ戻して下さい。彼は悲しみの感情に沈みます。ところで多くの場合、話をするとは何のことでしょうか。それは繰り返すということです。それは過去のことや、やり直したことを言い直すことです。それは点検することであり、定着させることです。人々は私の名前を言います。人々は私から離れます。人々は、私に代わるものとして存在しています。事物は決して私から離れていきませんし、私の名前を言うこともありません。どんなにそのことが奇妙に思えても、人は一人であればある程自分自身のことを考えません。特に想像力が強ければ、その対象である事物を一巡りすることでしょう。事物と向き合って孤立していることは、一人で旅に出たように気持ちが高揚したり沈んだりします。自己のことを考える者にとって、そのことは些かに負担であり、自分自身のことを語るのが或る種の友情ですが、それを逃すことになるでしょう。彼は多くの事柄について、数を万物の原理と見做すピタゴラス主義的会話を求めるでしょう。あるいは同じ事柄を言うにも、数のことを忘れることは大変なことで出来ません。実際に起こった出来事で何時も人々が理解することは、修道士の孤独を自分自身の中に求める者には余り嬉しいものはないということです。優柔不断、遊戯、作り話、これ等は既に修道院のものです。思考することとは、自分を忘れることです。ニュートンは昼食を忘れて思考しました。外へ出発することはかなり男性的

な幸福で、自分自身を繰り返して話すことでもあります。そして、思考することとは何時もほんの一瞬の旅のようなものです。(2)

(一九一〇年十一月十九日)

(1) モリエールの喜劇『病は気から』(一六七三年)の主人公。

(2) アラン研究所版やプレイヤー叢書版では、最後に次の一文が追加されている。〈このことをそっくり私に考えさせてくれるのは、偉大なるトルストイの逃避行です。〉

トルストイを表すには、如何なる線で描くのでしょうか。それは〈世界〉です。私たちが存在する共通の〈世界〉です。驚くべき才能であり、スラブ民族の魂です。私は、まさしくその反対のものも認めます。彼の全作品は、全ての人々のためにあります。直接的に直ちに全ての人々のためにあります。緻密でもなければ洗練されている訳でもありません。それは実に見事です。何故なら本当に平凡であるからです。批評家たちは独創性が貧弱であると言います。そんなものは狂気であり、鍵をかけて最早思考しないことであると言わなければなりません。

トルストイは全くその反対です。世界における自由な共通した〈理性〉です。〈世界〉と一体化されています。もしも私が彼を〈聖書的〉とか〈福音主義的〉とか〈抒情的〉とか言ったなら、何時も同じことを言いたくなるでしょう。彼は少しも要求しませんし、彼の中から生じた卑小さを言うことはない私は理解しています。彼は殆ど心理学者になることから全く解放されていると私は言います。

私たちの内部の感情は、良く言われているように、決して偉大ではありません。嘘だらけです。最高の強さは、何時も横隔膜や胆汁の袋にまで付いてきます。その点では、私たちには歴史があります。私たちは生まれて、生きて、死にます。それは薬剤師の歴史です。換言すれば、体験したものを上手く名付けるためには、それを感じるだけでは不十分です。それを考えなければなりません。共通の〈感情〉です。〈世界〉が共通になるという意味です。そこに心の真実があります。

心の真実は、決して悲しみの袋にはないと言えます。それは世の中と同次元にあります。世の中にそれを描かなければならず、事物の秩序によって説明しなければなりません。共通の感情は、その様に説明され体験されますが、本質的にはそれは詩です。聖書が偉大であるのだからと思いたい人々は、ユゴーが『ルツとボアズ』でそれを説明したように、この世の中で生まれる文学と共に自分たちの感情を書かなければなりません。ルツの感情は星々の中で書かれました。読む値打ちがあり、この記念すべき場所では、あらゆる人々が顔を上げます。そうしてユゴーは、それに大変な努力を傾けます。

トルストイは、そこへ何時も自然に行きます。自分の横隔膜の中には何もありません。全てが外部にあります。彼の永遠の英雄たちは、決して彼ら自身が薬剤師ではありません。彼らの感情は世の中全体の部分に触れます。彼らはあなたをつまんだり、くすぐったりしません。彼らと一緒にいると感じるや否や、全世界が広がります。全てが素晴らしい対象になります。アウステルリッツの戦いのこの負傷者を思い出して下さい。その負傷者は雲の間から青空を見詰めます。そしてもう一人の人は、刈取り機で麦を刈ります。更に、他の人は「恵みの雨よ降れ。十分に私を濡らせ」と言います。彼らは、自分が感じるものを良く感じていません。でも、それを良く見ます。それを言うには世界がなければなりません。〈世界〉が人間であるという意味で、それが人間なのです。

真実の目覚めです。それというのも人が眠っている時は、殆どそれだけでしかないからです。

全てが何でもないので同じです。しかし人が目覚めたなら、私たちの周りの〈世界〉は爆発したようになります。事物を通しての呪文があります。突然に斜めに広がって行き、自ら囚人を自由にします。それは私が〈聖書的〉とか〈抒情的〉とか呼んでいるものです。もっと正確な言葉が見付きません。皆と協同して行う〈巡礼〉であり〈祖国〉です。同時にあらゆる意味で、全ての人々の救いであり、〈博愛〉です。魔術師の魔法とはその様なものなのです。

(一九一〇年十一月二十日)

産業は自由であると言われる時、何かを思い出させていると人は思います。以下は、鉄道産業について大変に良く知られている二つの逸話です。それらは如何なる時でも産業精神が冷酷な役割を確かに持っている、と言う批判者は必要であることを分かせてくれています。

或る会社が事故で列車を粉々にして、旅行者たちは酷い目に遭いました。その時から線路、信号、車両の検査が行われ、掲示板も作り直されました。当然に費用が多くかかりました。線路の技術者は何かに答えて次のように言いました。「私たちはこれらの改良が高くつくのを知っている。事故の費用も、年間の平均額を知っている。死者たちの家族や負傷者たちへの賠償金という償いに多額のお金がかかることを知っている。でも二番目のようなお金の支出額は、他の支出額よりも大変に低い」。それ故に、そこにいるのは冷酷な暗殺者です。暗殺者は殺すことを断言して、血の値段のために貯えているのです。

踏切は幾つもあります。リヨン線のパリ・ヴィルヌイユ間に一つ作られましたが、それは六本の線路を横切るもので、全く大変な交通です。昼も夜も見張る二人の踏切番は、彼らの生命をそこで危険な目に遭わせています。横切る道路は、ある時間になると車の運転手、自転車に乗る人、野菜栽培者たちが急流のように通って行きます。列車は全速力で通過します。私は列車を見ると同時に、車両を数えましたが、四両まででした。それは本当に殺人機械です。人間の肉を挽肉にする機械です。そして全くの新品です。そこでの監視は、それらの計画に同意しているのであり、避けられない事故を予め副署していたようなものです。

しかもここでは全てが計算尽くである、と言われていています。トンネルを造らなければなりません。何故ならトンネルは、交通の流れを切らないと言われていているからです。でもこの場所では、人々を轢くようになっていきます。というのも統計上予想された事故は、上方にしろ下方にしろ、架ける橋よりも安上がりになるからです。人間の血の値段は、小石の値段のように計算されているのです。

ところで私たちは、人間の生命が鉄や木や小石のように扱う計画を理解出来ないと思えるためには、全てが反動的であるか急進的であることに同意します。例えば車の運転手が人を殺した時、〈保険の支払い〉を思うだけでは、誰も我慢出来ません。奴隷を廃止したのは、人間と道具をまさに区別したのです。人間の生命に尊厳の気持ちを確立して、強固にしなければなりません。それは〈会社〉について〈国家〉が厳格な法を定めることです。殺人から脱するのに、賞を与える必要はありません。〈会社〉には、次の二つの解決のうち一つを選択する自由はありません。殺さないためにお金を支払うことと、殺したことに支払うことです。良識だけを恃みにして、二つの逸話を続けて行って下さい。あなたを何処までも遠くへ連れて行ってくださることでしょう。

(一九一〇年十一月二七日)

石灰岩の断崖にはリラ、西洋サンザシ、マスカットバラ、ヒソップ、マヨナラが覆われています。洞窟は穀倉や家畜小屋に使われています。泉がある高さと同じ処に道が伸び、家々があります。頂上には教会があり、無骨な人々が長く生活しており、美しい娘たちと老婆たちがおり、良識があり、家父長制での平等があります。そこは楽園です。

暫く経って私は、その娘たちが臆病なのを知ってびっくりしました。決して若い娘ではなく、十六歳よりも上でした。しかし何に恐れていたのでしょうか。人里離れたこの村には、四年間見知らぬ人は一人も来ません。泥棒も犯罪もありません。狼男たちとか幽霊とか、何かそんなことが問題なののでしょうか。それも違います。彼らは想像力をそんなにも沢山持っていた訳ではありません。森の中に住む老婆が言っていたように、「生きた人間は怖い、死んだ人間は怖くない」のです。こうした訳で息を切らせた娘が多分、あなたに幽霊とか亡霊の話をしてきます。あなたは気を付けて下さい。彼女は嘘を付きます。彼女には男たちが怖かったのです。それが全てです。

彼女はそれを言いません。決して言いません。何故でしょうか。言えば喧嘩の原因になるからです。更に、男たちに付け狙われている娘である、と少し間違っで見られているのです。注意深い家族の中で母親は、もしも昼間の娘がそんなにも色っぽくなかったなら、夜がそんなにも怖くはないのと言うのにそれ程時間はかかりません。夜は、仲の良い恋人たちには良いものであるとも言わなければなりません。そして私は、他で観察したことをそこでも観察したのですが、それは娘が恋人を選びたかったなら、少なくとも選ばなかった男たちを考慮に入れなければならないということです。

結局、彼女は何も言いません。怖いことも白状しません。そして真面目な人々は言います、「何故、彼女らは夜という敵に出会っても慣れてるのに、怖がるのだろうか」。その問題は十分にあり得ることです。都会の人には考えられないのですが、田舎の夜に小さな森と森の間や、雲の下を歩いて行く時、道は茂みと同じ位に暗いのです。お伴を付けてやって下さい。彼女たちは何時も受け入れます。待ち伏せしている男の人影のことを屢々考えて仕舞います。人は最後には全てを見抜きます。

かくして無邪気な十五、六歳を過ぎると、娘たちは厳しい奴隷のような生活に陥ります。愛してもいない恋人に悪知恵を働かせますが、彼らには娘たちよりも力があります。そのことに関しては誰も何も言いません。この戦いは無言です。労働、新鮮な空気、結婚、子供、それらが直ぐに瑞々しい青春を萎れさせて、平安がやって来ます。しかし心は、実は残酷なものです。女性として彼女が自由についての話を注意して私たちに聞かせる時、彼女自身の裡では辛辣に笑っているに違いないのです。女性に対して欲情を抱く者が、彼女について或る種の権利を持つのは大変容易に許されているのです。女性は可能になれば復讐します。女性たちに与えられた選挙が、この夜の戦いや沈黙の恐怖に対して、原則として何かが出来ると私は信じています。

(一九一〇年十二月六日)

エリートは共和国を愛していません。仕事とか才能によって社会において現実的な何らかの力を獲得した者たちのことを私はエリートと理解しています。でもそれで都合がない訳ではありません。何故ならその種の間人たちは、世論と言っているものを決定しているからです。私はそこに、管理者、技術者、文学者を見ます。彼らは人間関係や結婚によって富裕者たちのサークルがしっかりと出来上がることしか考えません。輝かしい人生を送る世俗的なことが全てなのです。そのことのために彼らが唯一興味があるのは、公平さとは反対のことです。労働者団体に残されている自由は、自分の手で決して働かない者たちの利益を減らすためのものであるのは極めて明白です。私たちが自然と運営されている部下の俸給引上げが、重要な地位にある者たちには好意的でないことも明白です。既に一万五千フランを得る地位にいた高級公務員が、あっという間に同じ職務でありながら、一万八千フランまで上がったことを近頃私は聞きました。もしもこの種の話が公開されたなら、議会は承認出来ないし、乞食の境遇である郵便局の配達人になることとなります。高級公務員たちは、それ故に俸給や仕事を突然に明らかにする、余りに激しい何かの光を何時も恐れています。代議士たちは彼らを恐れさせることがありません。代議士たちは、彼らと同じ生活をしております(1)。沢山の流儀が結び付き、九千フランで我慢出来ると考えなかったのに、九千フランでは貧困であると十分に知っています。有権者の力、教育の進歩、判断力の目覚めは、あらゆるものが彼らを恐れさせます。従って彼らが行うことは、共和国の考えとは全て別のことです。彼らは、それらの力が洗濯女の些細な勘定のための各々の時間が正当化されることよりも、実際に今では管理したり支配したりするようになることを言っています。

しかし私が恐れるのは、利益よりも情熱です。世の中は野心や金銭欲を起こさせながら、あらゆる方法で彼らは上手く食べて行きます。やむを得ず贅沢に使うことを自らに禁じている彼らには、大変に注目すべき激情があるのです。結局のところ彼ら自身の不平は決して正しくないことを十分に承知しております。そして既に行き過ぎであり、従って彼らの怒りは彼ら自身にとって最良のものに対しても反対します。それ故に彼らの負債は、民衆に対して刺激します。取分け、服従しなければならない世論を、世の中に広めます。労働者や有権者や代議士や、下品な言葉を言うのと同じ位に無礼極まりないことなどに反対するには、決まり文句があります。何時までも続く議論は可能ではありません。一つの考えを継続させたい者は、唯それだけで無作法です。主張というものが誰かを傷付けるのは本当です。若者は直ぐに遊びのルールを理解しました。彼は、あらゆる成功を諦めざるを得ません。恋愛もそうです。若者は諦めて何か地味な仕事や賃金が低い仕事をせざるを得ません。あるいは更にそれに固執しないで、世論と別れざるを得ません。彼は殆ど決して躊躇しません。彼は共和国に反対するあらゆる人々の才能を、この世の中で採用するようにします。従って有権者は、有権者自身に見捨てられます。もっと正確に言うなら、最も学識のある人々によって裏切られ軽蔑され侮辱されます。そのことを理解しなければなりません。そして共和国が〈自然〉や〈科学〉や〈理性〉に反対していると言われても決して驚くべきでなく、寧ろ次のように自問することです。「私自身に絶望を齎すために、彼は幾らお

金を払っているのだろうか」。

(一九一〇年十二月十五日)

(1) 一九〇六年十一月に、国会議員歳費の増額が九千フランから一万五千フランへ、両議会とも議論もなく、殆ど全員一致で大急ぎで可決された。世論による激しい非難があったが、この決定は一九一〇年にもう一度あり、冷やかしの嘲笑の的となった。

(次章へ続く)

もしも全ての党派が縮まって、社会党が生まれたように統一されたなら、私たちは狂信者として戦争へ行ったことでしょう。如何なる教会も、何の役にも立ちません。教会での馬鹿正直な者には我慢出来ません。彼は原則に遡り、何でも再び問題にしがります。社会主義には恐らく奥深い真実があります。恐らく疑わしい見解もあります。例えば所有権の集中という問題があります。それは彼らが言うようには決してなりません。給与や年金や利益については、フランス全体で自由に議論しなければなりません、偏見があってはなりません。私は議論する中で、自分の論旨を主張することが出来たもの全てを収集するのに注意深くなった人間を、只管理解しました。でもこの種の注意力は人間を愚かにします。

統一された社会主義が余りに独断論や不寛容や狂信的行為に至ったために、富や生産や独占や経済界の混乱についての議論は、社会主義者を全員欠席させること以外には可能ではありません。私はそのことを何度も確認しました。しかしながら、検討しなければならない昔からの主張があり、先ずは説明しなければなりません。例えば個人的所有権は、生産を刺激し、増進するというのは何らかの意味で本当です。でもそのことは多分、惨めなありふれた考えでしかなく、結局のところ多くの教養ある人々は今でもそこにおります。彼らの議論を聞いて、彼らに与えられる何らかの力に気付かなければなりません。一言で言うなら、彼らの思想を理解するための心配りだけで先ずは彼らの思想に這入り込まなければなりません。その様にして人は他者を教育し、自分自身を教育しているのです。私はこの種の議論に何度も参加しました。そして私が反論者の意見を常識の光に向かわせようとして、何よりも自分が教育させられることになる時は、殆ど何時もその様な検討を全て肯定します。誠実な人間を全て受け入れなければならないのは、真実がその儘であるからです。かくして私は、何時も真実であるためには〈宣伝〉を要求します。それは私が欲しいもののためではありません。私が望むもののためでもありません。あらゆる精神における思想が明瞭であるためです。

ところでこの種の議論において、統一とは一般的に何を言うのでしょうか。それは神学者を生みます。彼は破門します。彼は次のように書きます。「あなたは社会主義者のことを話している。あなたはそれが何であるか分かっていない。社会主義者の教義は一つであり、分割が出来ない。私はそのことをあなたに示すのである」。彼はそれを長い話の中で示しますが、彼は統一されたものが好きであって、人の心を擱んでいません。もしも誰かが率直に反論して誰もが十分に分かれば、統一社会党員は肩をすくめて言うでしょう、「そのことは長い間反駁されている。もしもあなたが社会主義を研究していたならば、そのような愚かなことは言わなかったに違いない」。私はそこで議論されていた間に、他のことも分かりました。それは、辛抱出来ずにいららして、次の様に言ってその場を直ぐに立ち去って行った人々がいたことです。「実際に私は、そんなことを聞いても信じない。彼らの議論は子供のようだ。彼らは本質的な真実を知らないのだ。彼らは何も読んでいなかったのだ」。以上は、何故政党が堀や城壁に取り囲まれているかです。以上は、何故教条主義が鎖で繋がれていて、それ自身で麻痺して、何故文字は精神を殺すのか

です。思想の交流や運動にしか、生き生きとして健全なものはありません。交流のない全ての国境は宣戦布告します。以上は、私が何故政党を嫌うかです。

(一九一〇年十二月二十日)

## 百三十二 大聖堂は何故大事なのか（CATHÉDRALES, POURQUOI RESPECTABLE?）

古い大聖堂が保存され、地方の古い教会も保存されているのを私はもつともだと思います。信者たちは決して満足しないとしても、費用を出し合っています。私たちはその上で全ての人々が一緒になり、国家主義者のバレスも社会主義者のジョレスに手を差し伸べるようになると思われまふ。しかし、その理由は説明されなければなりません。私たちがカトリック教育を受けるのは、子供たちのために良い教義を与えるには極めて重要であるからです。これらの国民にとっての有名な家である大聖堂が、もしも三位一体や地獄の煉獄や教皇の布教のためにしか存在しなかったなら、大したものではなくなるでしょう。それらは音楽によって整えられた共同生活を証明するものです。

社会は正しいです。社会は、百人の株主とか十万人の納税者によって抽象されたものではありません。社会は現実のものです。単なる隣人のことではなく、お互いに影響され敏感になる結合であり存在です。感じるこゝと、何らかの〈社会〉に触れることは、皆にとっては健全です。模倣の力はその時、私たち自身を外部へ引き出します。私たちは不平を言いながら、観念としての友情を求めずに、事物としての友情を見付けます。人間嫌いになるのは辛いこゝとです。判断力によるのであれば、何時もそれで十分です。お喋りは何時も辛辣です。家から家へ広がり、他人に不満である人は何時も自分にも不満です。私たちの矢は、私たちにはね返ります。石ころだらけの荒い感情や、発育の悪い未熟な思考は、そこからやって来ます。

〈世界〉の光景を何時も楽しむのは、〈信仰〉でなければなりません。事物の秩序が私たちに触れ、私たちを宥めますが、同時に恐ろしくもあります。この世には祈りがあり、大空の下で孤独になって歌わなければなりません。〈希望〉とはそれ自身が信仰でなければなりません。労働の娘でなければなりません。しかし〈慈愛〉が最良であり、私はそれを通して他者との友情や団結を期待しています。或る人と一緒になるのではなく、全ての人々と一緒になるのです。理性に賛成するのではなく、あらゆる理性に反対するのです。

少なくとも人々が集まる時は、そこに悪魔がやって来て、私は分裂した精神、懐疑的な精神、陰險な精神、詭弁家の精神の声を聞きます。そうであるに違いないのですが、それは不愉快で、疲労させ、気力を失わせます。そこに最良のものは決して見付きりません。反論は、狙いをつけた者を立腹させます。争わなければなりません、それが全てではありません。同意もしなければなりません。共通の〈理性〉は、不信と信頼によって目覚めます。もしも疑わしく思わなければ、全てを信じることになるでしょう。もしもお互いに打ち明けなかったなら、何も説明されなくなるでしょう。人間たちは何時もお互いに愛し合うための必要性を大きく持っていました。彼らは、橋を造るようにこの愛を作りました。大衆をもつと存在感があるものにするためには、音が良く響くアーチ形の天井でなければなりません。全身全霊で歌われるためには理解出来ない言葉でなければなりません。全ての人々が同時に同じことを言えるためには、リズムが良い音楽のようであればなりません。そこから男性たちも女性たちも入浴しているようになり、彼らの

情熱は全て眠りに就き、彼ら自身は最も解放されます。〈神〉や〈天国〉を、教えられて来たように想像しますが、全然駄目で想像出来ません。彼らは、人生も肉体も同じものとして教えられて来ました。しかし彼らは最早、悪魔が恐ろしくなくなったのは間違いありません。私は、私たちの耳に聞こえて来る間違っていた精神の声を聞きます、「お前はそんな人間よりもましだ」。大聖堂は、人間に係わりがあるものですし、少なくとも人間のものです。抜歯鉗子が歯の形をしているように、宗教は私たちの情熱の形をしているのです。

(一九一〇年十二月二二日)

決闘は〈未開人〉と違って大変に良く出来たものだと私には見えます。私が〈未開人〉と呼ぶ人々は、全ての人を突き飛ばして通って行きますし、他人のことは考慮しません。他人の意見も考慮しないで、当てつけとか悪口を言って実りのない議論で終始します。結局のところ彼らは、平和な時でも彼らを不快にする全てのものに対して戦いを始めます。決闘は、十分に明晰な言葉で質問することで正しいものになります。「あなたは法律に従って行動し話し書くのか、あるいは戦いにするのか、あなたは選択しなければならない。法律による平等で、和解なのか戦いであるのか、それが真の戦いです。ここには剣があり、あそこには外科医がおります」。

乱暴で高慢な男は後へ引きません。しかし法律のルールに定められたこの博識ある戦いは、君主の仲裁人の前で、余りに血の気の多い人々にとっては、有益な学習になります。そのことは侮辱的な言葉とか、脅迫的言動とか、あるいは余りに激しい行動というあらゆる意味合いを見せてくれます。乱暴な人には権利の力も見えます。彼は急いで出掛けました。習慣の力が、殴り合いや大騒ぎにならず、元の歩きに戻します。そこでは感情の激発が、やらねばならないのと同じくらいの勇気を与えます。そこでは遺書を書くこと、定刻まで待つことを勧めます。その間に、彼の言葉と意志、要するに彼の理性と権利が、彼を入れずに他の人々によって議論され吟味されます。もしも彼が余りに厳しいこの試合に対して、剣が下手で歯をかちかち鳴らしたり、腹の内を隠したり両膝を上げて逃げようとしたり、彼が混乱して取り乱していたなら、そこにいるのは自分の全人生の戦いにはうんざりしている男です。彼は言葉を吟味して、他人の権利にも敬意を払うようになります。

もしも反対に彼には十分に能力があり、自分が正しいと思い、貴族のような生活をしていたら、この試合が彼に少しは真剣さを与えるのは避けられません。彼が飛び跳ねるのは、最初に駆け足をした後です。彼は止まります。勇敢な決闘者たちは優れた仲裁人で、殆ど何時も大変に礼儀正しいことで知られています。彼らの快活な言葉は全てがその時には戦闘行為のように思われますが、本来なら剣や血が必要となります。この関係は、彼らの口調が高められると本当のように思われます。口調を高める者は、怖がらせたいのです。怖がらせたい者は、戦いを始めます。戦いを始める者は、理性や権利を軽視します。この考え方は平和を定義します。礼儀の大切さとその意味を示しています。近頃の音楽家たちは、増五度の何かの音で戦いましたし、大変に勇敢でした。この種の議論は明らかに不条理で、お互いのための学習であるのは間違いありません。彼らは今では言葉の勢いが導いたのを知っていますから、最早軽率に戦いを始めません。以上が、決闘後の和解の意味です。戦いは仮面を取って自分を出します。そうして平和が長く確立されるようになります。

(一九一〇年十二月二六日)

クリスマスという祭りには天文学的なものがあります。神になった人間が、牛や驢馬の家畜小屋で生まれたのは有名ですが、それは偶然の出来事です。但し、その象徴は美しいものです。私たちは、〈幼年期〉や〈貧しさ〉によって救済されます。三十歳まで両方とも守っているのが幸せです。しかし、これらの象徴は如何なる夜でも構わずに結合することが出来ます。クリスマスの夜は、事物が自然であることに特色があります。凡そ一年中で最も長い夜です。長い夜の時間は、目覚めの時間である如く、最も傑出した夜を、個々の意味合いで、様々な灰色と死者たちの微睡む日中を多く閉じ込めます。夜がやって来るのを考える死者たちの日は、毎日少しは訪れます。でもクリスマスに関しては全く別なことです。賑やかさがあり、目覚めがあり、急いで蠟燭が使用されます。一年の夜のうちに、もう一つの別の半分に入っていきます。それは最早黄昏ではなく、曙です。人々は夜が去って行くのが大好きです。クリスマスは一つの出発です。クリスマスは一つの準備です。樹木、光、飾り、それら全ての物が本当の遠近法を描いています。クリスマス・イヴの言葉が憚ることなく鳴っています。

起きなさい、眠っている良い子よ

起きなさい、夜明けですから

これは月の神ダイアナの朝です。そして最も暗い夜には〈科学〉が外観を裏切ります。ここでもあそこでも救世主が生まれますが、それはどうでも良いのです。クリスマスは何時も復活祭の日の栄光を予告しています。あなたは博識になればなる程、実際には宗教そのものの公平な感情を持ちます。宗教に反対するとか賛成するとか思考しないで、宗教の中で思考しなければなりません。つまり平和や友情や正義を測ることは誰も出来ません。司祭たちは私たちの期待を裏切って来ました。

一年の中にはクリスマスに対立する別の季節があります。それは夜が一番長い六月下旬の季節です。夜の十時に北西方向を見ると、雲間に黄昏が見えます。その時には聖なる祭りはありません。如何なる天文学者もクリスマスの時には、太陽の祭りをお祝いします。しかし余りに寒いのです。彼らは、遊び感覚を良く理解していませんでした。それは待つことです。文化を温め直すのは希望です。文化とは、本質的に今あるものに反対して、これからあるものに向かって行くことです。六月には季節の幾つもの前兆が頬笑んで笑わせてくれます。真底では、それらは夜と寒さを告げています。しかし人は、未だそのことを考えません。夏は異教徒です。神々は自由に、瞬間の時を楽しみながら畑におります。狭い揺り籠の中ではなく、希望の中におります。

私は、別の関係にも気付きます。四月に宿った子供はクリスマスに生まれるのです。四月にそ

の子供は生き返り、十二月に生まれます。神学は不条理です。しかし、それを大地に植えて下さい。驚くほどに生長します。というのも、それは〈人間性〉が蘇らせるものであるからです。四月は欲望であり、クリスマスは揺り籠です。再生であり、陶醉です。誕生であり、希望です。全ての歩みが、太陽と同じ歩みです。愛は四月に生まれ、六月に燃え上がり、十一月に消え、クリスマスに再び生まれます。それ故に、偉大な詩は絶対的に真実です。しかし詰まらない詩人は司祭のようです。彼は、譬えるために譬えます。象徴は象徴でしかないと信じています。靈感とは混乱であり、比喩には理性がないと信じています。従ってその音楽家は、彼の音楽が何かを表しているのを望んでいます。ところが本当の音楽は何かなのです。そして本当の比喩も非常に理性的なものなのです。

(一九一〇年十二月二九日)

もしも悪意ある相手と長く議論したなら、愚かなことを言う羽目になります。もしもこれらの聖職者支持者の意見を真に受けて、私たちに奇妙な教科書臭い独創性のないものを書かせるようになっていたなら、私はローマ教皇や王に反対して大いに力強い文書を書く人に期待します。彼らはどんなことでも何時までも議論して、選挙で投票される位に長く戦います。彼らは兵士のいない将軍です。その様なことは良く聞かされて来ました。私は、この狙撃兵の戦いに利点はなく、私たちの教訓は無駄であったと思います。

文法の例文から〈神〉が削除され、町を描く時に大聖堂が忘れ去られたのを私が見る時、確かに私は相手の嘆きから生じるものを嬉しく感じます。そのことから私が理解することは、それは今では力がないということです。この感情は私たちの裡で共通しています。何故なら、専制君主主義は醜悪であるからです。それは司教たちにくっついて教育しないことがより道理に叶っています。結局は、何かにそして誰かにくっついて教育しないのが、より道理に叶っています。その代わりに、司教たちの陣営の周りを回ったり、中に入ったり、先生になつたりしないこと、そして結局は申し分のない〈宗教〉、〈神〉、〈告解〉、〈魂の救済〉を論じないことです。

奇妙なことに私たちは、神政政治社会で生活して来たが如く、司教とは反対の行動を取ります。確かにそれは何らかの口実を与え、少しは勇気を与えます。もしも私たちが宗教を自然で人間的なものとして受け取り、それが真実の何かを示すのを目指していると解明していたなら、善き司祭を証明することになり、偽善者を暴くことになります。その上で人は、ユゴーとかジャン＝ジャック・ルソーとかスピノザを読めば良いのです。一つの真実は色々な多くの服を着ることが出来る、と人は理解します。私たちは世界の息子である、と詩人である神が説明しています。世界は最高の美によって何種類もの神託を与えます。星が光る夜は、理性を超えています。モラリストの神は、もしも正義を殺したなら悪人は決して司法を殺しませんし、全ての廃墟は決して法を押し潰さないことを説いています。というのも、正義が報われる別の人生があるからです。その正義が不公平よりも価値があることに耳を傾けて下さい。そして成功も富も好機も、そこでは何も影響を与えません。この人生は永遠ですが、それを長く待たなければなりません。それはこの世のものです。〈人間性〉がある処には、暴君は決して脅しに入つて来ません。お金持ちも決して得をしに入つて来ません。公平であることのこの正義を、神の正義であるとあなたは言いたくないのでしょうか。何故なら、それは王の正義ではなく、役人の正義でもないからです。確かに、権力が決して入つて来ない処には要塞があります。しかし、サヴォア地方の助任司祭や歓待された司祭は、そこで私たちの前にいました。プラトンもいました。スピノザもいました。スピノザは無神論と見做されてきました。しかしながら彼は、本当の宗教と本当のキリストの教えを取り戻したかったのです。彼は、〈必要性〉を愛して理解する者が情熱や死からの避難所となることを教えました。善き女性は、所謂祈りの数珠であり、それと同じことを考えようとしませう。宗教は、それらの数珠の木製の小さな粒の中にあると信じるべきです。私たちは、彼女よりもより偶像崇拝者になる危険が多くあります。

(一九一一年一月一日)

淫らな踊りやその種のものについて、全ては自然なのが良く、不健康な裸体の効果は聖職者の不倫を齎し、自然を抑えたり損なうのを望んでいたのだと言って、人は難局を切り抜けます。私は、羞恥心があるではないかと敢えて言いたいです。それは罪の意識に、より重みを与えています。しかし混乱した観念から自由になると、難問をまだその儘にして、大変に明白な言葉を生むことが出来ます。

性的欲望は理性とは反対に、多分最も力強く、確かに大変に力があります。絶えずサムソンとかヘラクレスが自分自身の指導者を失って、そこから不正の共犯者になります。善き女性の祈りに抵抗することが出来る聖職者は少ないのです。そして、ご存知のように情熱的恋愛は、大部分が不当を説く奇妙に狂ったもので、恐らくそれらを全て説明しています。長く欲望を抱いて追いつけた女性のためでなくても、何故これが贅沢なものになるのでしょうか。贅沢とは際限がないものです。享樂することも又問題でなくなるや否や計り知れませんが、或る種の犠牲のようにオペラの偶像的存在を示すのが問題になるのです。そこからは善の創造における混乱があります。そこからは超人の屈辱があります。どんな混乱よりも悪い屈辱です。というのもその時、彼は自分自身を抛擲するからです。より崇高な意志を追い払うからです。この側面から私が欲望について理性の力を理解する純潔は、正義と緊密に結びついています。

もっと別な言い方をするなら、恐らく、より緊密に結びついています。肉体的快樂の濫用は欲望を増大させ、最後には酩酊の如く一種の怠惰と無為を生みます。医者や教師の眼には、売春婦のひもは愛の喜びを悪用する男以外の何者でもなく、抗い難い怠惰に身を投じているのです。同じ結果は、女性の肉体のことを余りに多く思考する者たちにも認められます。少なくとも、もしも彼らが教師とか管理者とか大臣とか立法者であったなら、そのために恥ずべき手段で生きることは余儀ないことではないのです。彼らはそれでも自分の職業の役目を果たしているのです。彼らは熟考し議論し署名します。しかし、勇氣はありません。彼らは全てに関わりますが、何も手に入れません。彼らの知性は既に瞬時にして敏捷さと優雅さと巧妙さを手に入れますが、力はありません。それはそれなりの茫然自失です。私たちはそれらを良く選択します。しかし彼らは人々によって理解します。気晴らしによって一身を捧げます。彼らを目覚めさせ、純化させ、磨く芸術と、遊蕩の混合によって、内面が老いぼれになるのです。その結果、実を結ばない労働、予定、計画が山盛りになり、この気力のない慎重さが全てを翌日へ先送りするのです。輝かしい文明には、快樂によって死んで仕舞う危険があります。音楽や舞踊や絵画や彫刻や詩歌が事物を美しくするというのは、悪を軽減することではありません。毒は同様に、飲んでもそれ以上甘くはなりません。

それ故に、私たちは余りに率直に自然を信用するようになりません。全てが自然です。もしも酒を飲みすぎたなら、不規則に歩くのは自然です。もしもあなたが犬と一緒に暮らしたなら、犬のことを考えるのは自然です。意志的に規則に従って科学が行われれば、意志的に規則に従って品行を正しくしなければなりません。そして若者たちに死を見せることは、全ての根本を掘り起

こす前に、彼らの全ての力が不正を引っ張ることになっています。

(一九一一年一月五日)

官公庁が外交官を選び育てるのは元々のことであって、学者が育てるのではありません。管理職者というものは約束者であり調停者であり平定者でなければなりません。怒り、欲望、対抗意識、競争、策謀、告発、それらにはそれらなりの理由があります。ここには専門性の特技というものはありません。人間のメカニズムを知らなければなりません。従って、それは良き知事を生む法学ではなく、良き電信管理者を生む電気現象学でもありません。それは良き共済組合長を生む災害や年金の学問でもなく、鉄道の良き管理者を生む輸送学でもありません。河川の航行の良き管理者を生む水の流れや逆流の学問でもありません。橋や堤防の良き管理者を生む石やモルタルやコンクリートの学問でもありません。それは芸術の良き管理者を生む絵画や彫刻や演劇の学問でもありません。それらの学問は、未来を見ない若い技術者とか、つまらない局長とか、つまらない道路管理係官とか、つまらない衣装方とか演出家にはお似合いです。人は出世をすると人間を支配するのであって、事物を支配するのではなく、事物の法則ではなくて情熱の出し方を考えなければなりません。そこには有名なやり方が示されることになります。「それは良き技術だが、良き管理者ではない」。

電信の偉大な発明者が全く僅かな年金と共に死んだことを私は最近読みました。私は最初その時に自問しました。「何故彼は部門管理者でなかったのだろうか」。その答えは容易に分かりました。彼は、電信のことは知っていましたが、情熱がなかったのです。如何にすれば彼は、請願者たちを受け入れ、彼らが言わなかったことを見抜き、隠された意図を理解して野心を吟味し、世帯を再建し、借金を算定し、姻戚関係とか親戚関係を嗅ぎつけることが出来て、妻を守るまでになるのでしょうか。そして同時に彼らから隠れて、自分の心を包み隠し、些細なことのために生き生きとした興味を隠し、予期しなかった新事実を冷静な態度で迎えるのでしょうか。つまり何も肝心なことは言わないようにして話し、灰めかし、否定することです。気さくに聞いているが何も聞かせないことであり、解けない可能事を切り捨てながら自分の中の敵が空腹になるのを利用することであり、満足と不満を追い払うことです。新しい不満には苛立ち、そして昔のことは忘れっぽくなります。要するに、情熱を他人と対立させて引っ張るロープがそんなになくても、犬たちを引っ張るために、犬たちのような欲望を革紐で繋ぐことでしょうか。この術には、流れている電気と、それと同時に同じ線上を流れる別の信号の認識とは、如何なる関係もないということなのです。

それらの二つの学問は、殆ど一緒にならないことも私は言います。というのも発明者は率直で、全てを高度に考える人であるからです。彼の思想は、彼よりももっと強いのです。反対に思想を鎮めたい時は、それを眠らせます。真の外交官とは、何も考えない人のことです。そこでの最も高度な方針は、平凡な人々の必然的な選択によって行われます。同一の学問においては平凡であると私は言います。例えば、電信の管理者は電信の学問においては平凡である、と私は確信しております。航海の管理者も水力学の学問においては平凡です。天文学の管理者も天文学の学問においては平凡です。共済組合の管理者も経済学の学問においては平凡です。しかし、人を騙す技

術においては全てが高度です。技術者は二番目の地位に止まっておりますが、そうであってもなお幸せなのです。あらゆることにおいて指揮者は無能力です。あらゆることにおいての技術的業務に無力です。無能力であり無力であるのを例外なく彼らは忘れていきます。でも彼らは驚く程に、何にでもお互いに理解し合っています。

(一九一一年一月八日)

平和を説かなければなりません。〈正義〉という友人たちが、正しい戦争の代わりに乱れた愛によって全く単純に戦争を賛美することがないように、戦争の正体を暴かなければなりません。

もしも財産の不平等な分配や、仕事と余暇の不平等な分配を注意深く考えたなら、行き過ぎた不公平があっても自然と消えてなくなります。大多数の人々が、少人数の人々に自然と影響を与えて、何時も均衡を取り戻すようになるからです。つまり何らかの平等があります。何故そんなことが行われないのでしょうか。何故そんなことが行われて来なかったのでしょうか。何故複数でなく、一つの権力を単純化して説明するのでしょうか。それは戦争によって説明されます。

しかし、そのことは注意深く聞かなければなりません。軍人とか番人が何時も自分たちの報酬が決定されているとか、所謂強者が一番多く手に入れている獅子の分け前であると言うではないですか。大衆は、恐れていて平和的であると理解される儘です。ところが多くの人々が穏やかで怠惰である、というのは決して本当ではありません。反対に殆どの人々は、戦いが好きであると私は思います。それは戦いの養成や、それらが齎す不平等が、慣れるのに大変難しいためであると思います。簡潔に言えば、戦いは悪でしかありません。何故なら大部分の人々は、好戦的であるからです。

彼らは獰猛ではないと思いますし、意地悪でもありません。そうであったなら、戦いしかないでしょうし、正義を愛することも決してありません。彼らが戦いが好きなのは、それが彼ら自身にとって最良であるからだとは思いますが、以下はそのやり方です。力の戯れは調整されています。それらは愛も前提としております。つまり結合であり、貞節であり、共通した感情の熱さであり、共通した行動の訓練であり、そして要するに我を忘れた人生であり、小さな悲しみや恨みや用心や倦怠も忘れた人生です。戦いは英雄崇拜において、最も平凡な人間を投げ捨てます。その様な人物は多くおります。高貴な生涯を感じます。彼は自分を何でも全て騙しません。少なくとも彼には決して動物性に対しての嫌悪はなく、再びそれを温め直します。反対にそれを愛しております。自分を忘れた人生であり、戦いによって武器よりも突然に必要なのが正義の実践です。

大変な努力で頑張った後で、戦いや戦いの教育によって盲目を尊重することよりも、もっと別の何かが残されます。自分の厳しさや哀れみに対する一種の甲殻が残されます。その他のこととか、正義のために今十分に行われたというこの観念も残されます。親衛隊兵士は、自分の傷を見せて言います、「私はあなたよりも沢山苦しんだが、不平を言ったりはしない」。お金持ちの彼は、非常に報いられたとは決して思いません。貧乏人の彼は、他人を理解し、敵とも上手くやることを考えます。二人とも考えます。それらの戦いは偶然であると考えます。思い出は危険な平等を蘇らせるので、要するに進んで服従し、時間を単純化し、個人として優れた人には勇気があります。将軍と兵隊の間にも親密な友愛が生まれます。これらの思想の必然的な働きは、決して議論されずに、組織された従属の中で好戦的な国民に引き起こします。以上は、戦争が暴君のゲームである理由です。正義はそれにお伴しているのです。親衛隊の不正を擁護しているの

です。これらの理由により、正義のためのあらゆる権力の行使が、正義を殺しております。もしもこれらの関係が明白に理解されたなら、何世紀後には、結局その挑発は権威を失うこととなります。私たちは偉大なものを見ることになるでしょう。

(一九一一年一月十三日)

力の概念は、熟考する人々の羅針盤のようなものです。観念から観念に少し力に近付くや否や、突然にそこへ落下します。かくしてカール・マルクスは、資本主義が如何なるものかを示した後で、労働者がしようとしていることは、一方で労働力での支払いはそれに見合う正確な代価ですが、他方で労働力の提供は出来るだけ高くすることでもあります。それは結局のところ労働力、つまり労働者の能力と力とはごく普通の商品です。労働契約は、競り売りする市場のようなものです。そこでは、売らないことも権利です。「二つの権利を平等にすることは誰が決めるのでしょうか。それは力です」。そこは正しい分析の後で、著者が自分で作る一步一步の足跡を監視する処です。そこには突然の落下のようなものがあります。力はいわば、それを思考する人々を眩惑します。あるいは寧ろ、力は明瞭な仕事を生みます。儀式もなく議論を終え、かくして力の概念は分析を追い払い、力が加担するや否や全ての場所を占領します。

「常に私たちは力に支配されている。常に権利を生むのは力であり、権利を廃止するのも力である。武器を取れ」。以上は最後の祈りであり、海の中に入るように社会主義者や君主制擁護者や日和見主義者の話は、その中に身を投じることになります。それは喧騒であり、観念の渦のようなものであり、敵船団を飲み込みます。そこからは何時もびっくりするような結論が浮かんで来ます。躊躇う人々は全てがその中で溺れます。それらの権利に異議を唱える全ての人々が私たちにそこに導くなら、何を正しく思考するのでしょうか。心が打たれなければなりません。そしてもっと正確に言うなら、もしも優しさに心が打たれたいのなら、余り考えない方が良いのです。

この誘惑には抵抗しなければなりません。力は単純な概念ではありません。力には力があります。悪人は、自分の欲求を満足させるために力を利用します。労働者は、ストライキを成功させるために力を利用します。それらの力は全くの別物です。力は最早、ここでは欲求を満足させる方法ではありません。労働者は、働かないで他人の訴訟費用で生活することなど考えません。何よりも公平を信じた労働契約が行われることだけを望んでいます。激しい力は、ここでは同時に平和と正義を目的とするものです。労働者が、それは全てを決定する力であると言う時、悪人がそれを理解するのとは意味が違ってきます。

警官が力を利用する時も又、別の種類の力を行います。というのも眼の前には最早、二つの競争相手がいるからです。一方には大衆、もう一方には警官です。警官は行動によって公権力を具体的に示しますし、各々の市民は他の市民と平等です。均衡を確立するための方法としては、少なくとも他人と自分の権利を妥協させなければならないことを説明します。従って警官は当然「平和の番人」と呼ばれています。

そこにある力は自然と異なりますが、同じ名前を持っています。従って力は権利を作ると言う時、極めて何か曖昧なことを言っているのです。公権力は個人間の権利関係を作りますが、そこでは労働者が暴力によって自分の権利を支えていることを意味するものではありません。もしも悪人が、何か戦う権利のようなものを持っていたのだと言われたかったなら、既に別の意味を

同じ名前に持たせることでしょう。思考は力を溶かして解体させます。ある意味で思考は唯一、分析することだけで力に打ち勝つのであるとも言えるのです。

(一九一一年一月十六日)

社会学者は、未開人や未開人の考えについて話したり書いたりする時は、難なく評判を得ています。私は、物神崇拜の事例を探しに、そんなにも遠くには行きません。私たちは考えることを止めるや否や、全てが物神崇拜になります。ここに鉄の玉があります。私はそれを手に取ります。その色と丸い形を見るのと全く同じように、その重さも実感します。それは私の手で五百グラムの重さを感じるのが正しいとします。もしもその玉が木であったとしたら、もっと軽く感じますし、鉄の重さよりも軽いと言います。ところがその重さは、鉄の重さではありません。この玉と地球の間には引力があります。もしもこの二つのものが引力から自由になったなら、二つを結びつける糸は撓んだりぴんと張ったりするような動きをとることになります。少なくとも、両者の間に存在するこの力の動きに基づいて、巨大な質量をもつ地球は非常にゆっくりとした動きを始めます。それに反して、五百グラムの玉はそれよりも大変に速い動きを始めます。地球上に落下する玉のことを言って私は説明しているのです。それ故に、その玉の重さは玉の中にあるものではありません。地球と玉の関係が齎すものです。以上の私の理解は、私が経験から教えて貰ったことです。しかし私が注意するのを止めて、感じた儘に話すや否や、私は玉自体の中に重さがあると理解します。物神崇拜です。

もしも少しは賢明になりたければ、玉を引き付けるのは地球であると言うでしょう。それでもまだ物神崇拜です。それというのも、引力は地球の特性ではないからです。それは地球と玉の間に働く力の所産です。それらはお互いに引き付け合っていると云わねばなりません。それらの各々のうちには、引き付ける特性を持っていると信じることは十分に用心しなければなりません。というのも、例えば地球がもっと小さかったなら、玉が引き付けるのも小さくなり、もしも地球がもっと遠くにあったなら、玉が引き付けるのも小さくなるからです。その引力は玉の中に隠れている力ではなく、地球の中にもありませんし、両者の関係であると理解させてくれることになります。

金のことも同じです。私たちは一般に、この金属の中には購買力が隠されているかの如く、金には価値があると言います。しかし、もしも金が火打ち石と同じ位に平凡なものであったなら、金の価値はもっと小さくなります。あるいは小麦が珍しいものであったなら、小麦と同じ位に金も沢山与えなければならぬでしょう。金の価値はそれ故に、金と交換する物との間の関係であり、金そのものが所有しているものではありません。以上は、私たちの常識が理解させてくれることです。しかし注意力が緩慢になるや否や、私たちは物神崇拜者になります。金は貴重になり、愛され、見て美しいものになります。そこにあるのは偶像的なものであり、信仰になります。もしも豊かさが金によって築かれたなら、崇められます。こういう訳で常識の王子であるデカルトは、至る所で私たちに言います、「あなたは感覚で聞いてはいけない。それらは何時も嘘つきである」。

(一九一一年一月十九日)

(次章へ続く)



不可知なものである、とバレスは言っています。その他の人々は、神秘であると言っています。それは村の教会が表しています。歌は大変に良く知られています。しかしそれは歌とは全く違います。不可知なものは、事物の本質として教会にあります。それは大空の下にもあります。人間から遠く離れていますから、考えなければなりません。それは海岸の上とか急流の川岸とか、必要性を把握しなければならない雪に覆われた山々を目指しています。でも既に、その必要性が不可知なものと言われるのは間違いです。何故なら私たちはそれを良く知っているからです。不可知のものとは、事物の中に探し出したいことを意図しますが、お互いが噛み合って押し合い、そして元に戻ります。しかし、それをもっと良く理解すればする程、一つの結末と意志を見出します。そういうことなのです。それは私たちを手に負えない曖昧さに導く、想像力の遊びです。そういうことなのです。それ以外のことはありません。水や大地や風の中に悪意はありません。悪意もなければ如何なる意志もありません。事物の中には正義もありませんし、不正もありません。その必然性という風景を判断するのに手を加えないことが、既に高い教養から遠ざけられています。

村の教会は、全く別のことを教えています。それは全く不可知なものではなく、反対に完璧に認識し得るものです。それは正義です。必然性は人間の町でドラマも演じます。

情熱があり、不平等があり、戦争があります。しかし人間たちには別な生活もあります。彼らには、それが存在する筈がないことも分かっています。正しいことが打ち破られても、それでもそれは正しいのです。軽蔑すべき人間が強くてお金持ちになっても、それでも軽蔑すべき人間なのです。そして、もしも私が誠実で立派な最高の青春を送らせてくれた人に卑劣なことをしたなら、それでもそれは卑劣なのです。従って事実は何をも決めません。大成功を収めた正義に従って精神には秩序があります。衛兵も槍もありません。それは不思議なことではなく、反対に極めて明白なことです。それは全ての人々が一緒にそのことを考えます。人間が教会へ来ていたのも、全ての人々が一緒であったと言うためです。戸外ではないそこは、大変な力を感じる所です。しかし人間の造った建物の中や人間の力の中で、人間の本当の顔と一緒に描かれたものは左右対称で、薔薇形装飾で、均衡が取れています。音が良く響く場所の中では、言葉も大きく聞こえます。

如何にして商人たちは身を立てて、そして忍従を売り込むのか、そのことは十分に知られています。そして何処かの悲しい詩人が絶望してやって来るようになるのは、良くあることです。彼は何であろうとこの石で出来た本である教会の中に悪を読みます。それはこの世のあらゆる力に対して、共通した意志と生活を明らかに照らしています。この様にして事物を手に入れるために、大変良く不正を受け入れる優雅な精神が、そこに這入ることなく、説教の周りを慎重に回っていたに違いないと人は良く理解しています。

(一九一一年一月二十日)

宗教が自然とは反対の感情と不条理な思想で出来た組織であると言われていた時は、未だ宗教のことが分かっていなかったのです。それでは全てを理解していないと私は言いたいのです。というのも共通した信仰で、非常に長く保持し続けた信仰は、人間性にとって奇妙なものであると思うのは不可能であるからです。もしも司祭の話を文字通りに聞いて、その精神を理解したいと思うことなく、そしてそれを発展させる真実を発見することもなく議論しても、人は早く証明するようになりますが、何も立証していません。もしも宗教が人間の事柄でなかったなら、司祭は次のように質問します。至る所に宗教が見付かるが、何処からやって来るのだろうか。もしも神や、眼に見えない制度や、生活を越えた法則や、胃に入る食料にならない報いを信じることが、全くの不条理であったなら、つまりもしもそのことが全て人間でなかったり、少なくとも人間ではなかったとしたら、それは何処からやって来るのかと言わねばなりません。パスカルはその時、言葉の矢を放ちます。彼は凡そ次のように言います。「宗教だけが良識や快樂や興味や情熱や自らの行いであり、自然にぴったりとくっついているようなもので、結局のところは継続して来た唯一のものである」。それは次のように言い直すことです。宗教は人間的なもので、不可解なものです。それ故、宗教は神しかやって来ることが出来なかったのです。それ故、神なのです。そしてその意味で同じパスカルが、有名な言葉を繰り返し私たちに言います、「私は、それが不条理であるから信じるのである」。

それは不条理ではありません。反対に、宗教においては全てが説明が付くのです。彼らの神学というものにおいては、結局のところ真実があり、彼らのやり方というものにおいては結局のところ英知がある、と私は理解しております。それは詳しく示すことも出来ます。例えば罪の懺悔には、何か自然なものがあります。つまり庶民の歌には清々しい健全な何かがあります。しかし超自然的なものを否定する瞬間から、人はそれを前もって仮定していなければなりません。人間の産業は、驚くべき発明を見せています。実際に、知性は体力に勝っています。正義は支配することを望みます。大地の周りの全ての声は、自分で答えているのです。暴君や不平等に反対して、嘘つきや意地悪や放蕩者を崇拜することを許しません。私たちは、エラガバルス(1)に嘔吐します。兎に角、知性は欲望や情熱に反対します。そうして、それは一日では済まないことです。これらの模索や進歩や逆戻りは、闘っている二つの力の歴史でしかありません。東の間の力と精神的力、野蛮な人々の政府、そして考え込む人々の政府は探し求めて納得します。野蛮な人々は、何時も精神的力を服従させる偽善的な目的をもって司祭に変装しています。そして何時もこの間違った宗教に対して、真の宗教は秩序を回復させて、公平さと正義を救いました。従って、司祭たちの一方が系統立った馬鹿で、もう一方がお金持ちの大消費家で、正義に反対するとしても驚くには及びません。既に、全てが真実ではないのです。しかし、悪い司祭は何で悪いのでしょうか。全てが悪いものではありません。何故なら精神的力のために闘っているからですが、全てはその反対です。何故なら、精神を世俗に服従させたり、正義を暴力に服従させているからです。そして、彼らの思想と教義を回復させて、説明したり、綺麗にしたり、人間の根源を若返らせて

いるのは私たちです。そして良く見るために私たちは宗教を追い出さずに、宗教を救う資格が無い司祭を追い出すのです。言わねばならないことは以上です。

(一九一一年一月二一日)

(1) エラガバルス(二〇四~二二二)は、ローマ皇帝としてはアウレリウス・アントニヌスと称して十四歳で帝位に就くが、統治は乱脈を極めて、暗殺された。

なかなか開かない錠を開けたがって怒り出す男、いやそれ以上にこの錠のことを話し、鍵のことを大声で怒鳴りまくり、悪態をついている男は大変に滑稽です。そして彼がこの種の滑稽なことを行ったり、錠とか何か他のものに悪態をついているのは一日に十回もあります。怒りを行動に加える奇妙なメカニズムを理解しなければなりません。

怒りは活力の増加でしかありません。私たちが手と一緒に行動する時は、歯ぎしりしたり両足で地面を叩くことが良くありますが、何の役にも立ちません。それは私たちの肉体の全てが緊密に結びついていることから来ています。一部分の動きで全てが目覚めます。他の部分を興奮させます。私たちは筋肉の集まりであり、各々の組織が結びついています。私が言いたいのは骨格の一点のことで、大部分が一般的には眠っています。暖炉の前の犬のように、一方では単純に気が緩んでいてのんびりしていますが、他方では揺り籠を揺らしながら乳母がうとうとするように、小刻みな動きを機械的に行います。しかし、もしもそれらのうちの一部が怒った猫のように大きくなってごろごろ言って痙攣したなら、それらは単に近接する部分に伝わるばかりでなく、神経系統にも伝わり、不意に全てが目覚めて或る種のパニックになります。各々が幾つもの腱によって全ての力を引き出します。屢々、手や足をぴんと張るのとは別の結果を齎します。時々ぴくっと動いたり、震えたりもします。しかしながら、全ての不必要なこの働きには出費があります。その結果として血液を汚し、主として腎臓と心臓の間の他の神経によっても、街路清掃車や掃除夫や下水掃除夫を素早く働かせることになります。この様にして心臓もより速く脈打ちます。呼吸も速くなります。その結果、腎臓の濾過もより速くなり、そして同じ様なメカニズムによって涙も出て来ます。もっと適切に言うなら、体内のこの洗浄作用というものはついに筋肉を目覚めさせ、癲癇のようなものに陥らせて仕舞います。それは全てが、狂った錠に合わない役立たずの鍵を、行き当たりばったりで使ったからです。

しかし何故悪態をつくののでしょうか。恐らく私たちは筋肉に混乱が生じると、その度に悪態をつく言葉が加わって来るのに慣れていているからです。しかしこの関係がもっと身近で行われ、口や喉や肺の働きが激しい状態は、例えば犬の唸り声のように、嘎れた声やぱちぱちという音のメカニズムによって生まれます。闘いの中で聞かされる一種のあえぎ声であり、同じ様な言葉が使われます。結局のところ罵詈雑言は、怒った時の胸の唸るような音でしかありません。同時に私たちの思想に関して言うなら、私たちの耳の中の叫びの反響からはあの世へ行くことはありません。

滑稽なことと同じに、狂気に対しても如何に訓練するのでしょうか。それは実践によるのです。人は行動するために学びます。それは一部分を利用するために、筋肉の全てを最早目覚めさせないために、人は学ぶのであると言いたいのです。何かによって器用になり、平然となれます。最早、行動と一緒に走り出しません。取分け、行動の後のことを最早考えません。私たちの本質は均衡や平静さを残した儘であり、そして錠を開けます。従って騒々しい兄弟には反対します。行動しなければなりません、必要な行為が他のことに離脱することはありません。取分け、私

たちの考えは順番に行為に従いながら、恐怖とか怒りの喘ぐ音に似て来ることはありません。錠を崇めることなく、監獄の鍵を一回転回することを覚えなければなりません。

(一九一一年一月二五日)

「動物のために善人であれ」。これには考えさせられます。一人ならず老女が馬車に乗り遅れるのを見て、御者が引っ掛けて罵声が飛んでも、警官は見て見ぬ振りをしています。馬のことを考える前に、人間は人間のために善いことをしなければならない、と言うようになります。しかし、それは警句でしかありません。人間は人間にとって善良である必要がありません。彼らはそれを遠ざけます。それを酷く嫌います。平等を望みます。

一頭の馬とは何か。一匹の犬とは何か。私はそう言うしかありません。馬たちは見分けます。予想します。言葉を理解します。馬たち自身で話をします。そして、いずれにせよ私は確かに彼らを愚鈍だと思えますし、確かに馬たちの秣桶を引っ掛けて置きます。馬は直ぐに眠れるだけ眠ります。そして小走りに駆ける時も同じです。犬は、人間の顔を見ると何となく不安になりますが、その時は犬が人間のことを気にしている時です。しかし人間の眼には、悪態をついているとは思いません。忠実であると思えます。犬の主人は叩きます。犬は地面に伏せ、体を激しく揺すりします。殆ど礼を言っているようであり、哀れな老人に対して唸って言います、「ご主人は、ご主人です」。そういうことがあって完全に私は犬を見て分かったのですが、犬は犬であることに満足しているのです。治す薬はありません。私が教育したいと思っても、犬は何時も私に気に入られることしか考えません。私はそのことが良く分かった時、犬にとっても馬にとっても、私は善人になるでしょう。

それらの動物に腹を立てて乱暴まで働く人々は、恐らく余りに忠実にさせているのです。彼らは動物に悪意、怠惰、恨み、人間的な何らかの感情を思っています。動物たちと善人になる本当の理由は、それらは動物であるということです。

私は、私に似た者に敢えて善人になりません。私との類似点は、何時も私が考え感じているようになります。そして、まるで私は他人の善良さを望んでいないかの如く、善人と見られることさえ用心します。彼が私の意見に反対するなら、私は自分の意見に大変に拘ります。私はそれを押し出し、彼の観念の巣窟にこじつけます。手心も考慮もしません。しかし、それが歳取った人間でしょうか。無知の人間でしょうか。娘のように震える若者というものでしょうか。私はそのことを嘲笑します。彼が私に同情を求める時は、彼には同情がないのです。ないのです。ないのです。私は彼を対等に扱います。威圧的な何かが私を押ししています。もしもそれが虚栄心の強いものであったなら、私はそのことを彼に言います。もしもそれが間違っていたなら、証明します。私はそれを詰め込み、ひっくり返し、目覚めさせます。それが私の敬意です。敬意だけがここでは似合います。最も小さな阿諛があっても無礼です。それは犬との間では良いことですが、人間の間では良くありません。惑星の王様に栄光あれ。

人間は、何処でも何時でもそんな風です。何時も善い犬の役割を投げ出す訳ではありませんが、用心して下さい。犬ではないのです。偽善は犬を育てますが、主人を許していません。そのことをもっと言って下さい。意図のある言葉、抑揚、広がって行く同情というものは、憎しみという収穫物を産みます。そのことは決して忘れないで、良く覚えて置いて下さい。良く備えて置い

て下さい。あるいはあなたが同情している人間は、犬と同じ位に愚かなのです。でもそんなことは信じられない位に稀有なことです。

(一九一一年一月二九日)

迷信は人間にとって自然なものです。私は、それがあつた意味で無くなることはないと思つた。牡蠣に飽き飽きした人に、あなたはその後で美味しい肉料理や野菜を勧めて食べさせて、あらゆる方法でその牡蠣が美味しいことをその人に認めさせようとする。でも、その人にとって牡蠣は食欲がそそらないのです。その人の想像力にとって牡蠣のイメージは、嫌気や嘔吐の記憶に結びついていたのです。彼は牡蠣を見るや否や、機械的に胃が吐き気を催して来るのです。何も驚くことはありません。それというのも、私たちには良くあることだからです。二つの印象が一緒になった時、あるいは次々に現れた時、私たちは一方が他方を自然に連想させます。その印象が強くなればなる程、その関係も強くなります。

私の祖父は私に次のように言つて畑の境界を示しました。「私が忘れないようにそこに境界標示物を立ててあるのだ。父は、私が七歳になった時に私に手助けさせて、大きな平手打ちをその顔で食らわせたのだ」。モンテーニュは他の地方で、同じことを書いています。その様にして境界標示物を立てて確かな証拠となるように、そして一生涯のために迷信を大変良く利用することを知つたのです。子供がこれらのことを見詰めた時、その印象は脳神経の中を静かに通つて行きました。パンツ、と予期せぬ苦痛の一撃が血を蘇らせ、神経の流れをもっと強くして、その光景の全てを性格の奥深い処に刷り込まれました。過去においては学校の先生方も平手打ちや爪を慣例どおりに打つて、記憶の中に刷り込む同じ方法をやつていましたが、そのことに疑問も抱きませんでした。盲人が、他の盲人に見る方法を教えるようなものです。その様に刷り込まれた知識は、迷信とか犬が持っているような知識でしかなく、お望みどおりです。

司祭たちが良くやつていた繰り返し、銅鑼声、歌そして儀式による厳しい教育の力に対しては闘わなければなりません。しかし、その教育が完璧である時も、それらの出来事は何らかの平手打ちとか爪打ちを、何時も私たちに与えますが、それらは偶然の関係で決まります。もしも悪いニュースが幾つもの一週間のうち同じ日に起きれば、その日には不安な考えを齎すようになります。もしも私とその関係に気付けば、私は注意力を払つて良いニュースだけを刷り込むようになります。その日は、私には迷信によって臆病で惨めな日になります。それ故に最も博識のある人々の裡に湧いた偶然の観念の関係を見付けても、びっくりする必要はありません。というのも科学はそれらを壊さないからです。これらの牡蠣は美味しいとあなたは科学によって私に立証します。しかし私の胃には、鞭で起き上がり、少しも抵抗しない下等の犬しかおりません。

どうしようとするのでしょうか。迷信と同じメカニズムを理解することです。幾つもの意味と関係を結ばないことです。あらゆる理性に反対することを言わないことです。これらの牡蠣は腐つています。でも言わないことです。その日は不吉です。犬が震えていても、人間は考えている様子を見せないことです。それは出来ません。科学というものは印象に反対しますが、何時もそれらを壊す力はありません。私は千歩先に太陽を見ますが、もっと遠くにあることを知つています。私は星々を点のように見ますが、太陽のようなものであることも知つています。反対に全ての迷信は、人が感じたように判断したいのです。そのことは、もしもそれを働かせたなら、直ぐに

この世は自分の味方とか敵になる物神で一杯になります。最早そこに司祭がいなくなった時、私たちは既に迷信と闘うことになります。というのも迷信は、私たちには記憶と同じ様に、自然なものでもあるからです。

(一九一一年一月三十一日)

その学生は私に言いました、「些細な原因や状況から芸術的才能を解釈する以上に、もっと哀れなものが何かあります。というのも私たちは何時もシェークスピアとかバルザックのものを読むことが出来るからです。感情は何時も歴史家の些細な理性よりも力強いです。しかし、プラトンとかデカルトとかカントのように、第一級の思索家が問題になる時、そこに私たちは何を求めるのでしょうか。私たちの未来のための思想です。確信がある訳ではありませんが、デカルトのような人が最早現代の私たちの数学者や物理学者にとって最良のものは何も教えないと認めるにしても、兎に角、彼らよりデカルトが最良のものを私たちに与えてくれるのは事実です。私たちは若くて無知です。デカルトのような探求者の才能もありません。何故なら、デカルトの思想は決して正確無比な知識を沢山前提にしていないからです。実際にデカルトのものを読むと、表面上はスコラ哲学的で曖昧ですが、英知においては私たちよりも先行していることが良く分かります。私たちの理解力は、理解するために未だ十分に自由になっていないと自覚します。

ソルボンヌで注釈をする先生の授業を受けに行く理由もそこにあります。アランよ、仕返しの記事を書くためには、少なくとも一度はソルボンヌに来て下さい。単に注釈者はその著者の思想を理解していないのが明らかであるばかりでなく、そのことは既に残念なことですが、二世紀以上も昔の書物には理解すべきことは何もないと私たちに証明したがってのもいるのです。彼はデカルトを昔の時代に追い払います。追放しています。間違いを犯している博物館で、それに触れるのを禁じて、ガラスケースに入れて仕舞っているのです。もしもデカルトには考察すべきことが何も無いのが本当で、第一級の価値あるものを理解することは何も無いのが本当であったなら、最早話をする必要もありません。でも、それは本当ではありません。このおしゃれな葬儀屋が、私たちを葬列に誘い込もうとしている間に、私はその死者が決して死ぬことはなく、大地に葬られてもその精神は生きています。しかし、誰も私にそのことを理解する手助けをしてくれません。そこには文化があるのでしょうか」。

ありません。私は、決して仕返しの記事を書きません。私は、偉大な芸術家の価値を歪めて下げる者たちには、腹が立ちます。何故なら高潔な心の持ち主は、敬意を表するに十分値すると思えるからです。しかし、高潔な心の持ち主は十分に理解されておられません。そして、あなたが言う注釈者も恐らく誠実です。彼に欠けているのは理解力です。そしてプラトンとかデカルトを問題にする時、誰が十分に知っているかと自慢出来るのでしょうか。彼は本を読んで、自分なりに身に付けたのです。それ以上にあなたは何を望むのでしょうか。芸術家は美しい立像のようなものです。そして思索家は、その全体を作り直すべきです。一人ひとりが自分の大きさにして建てるのです。もしも中位の大きさであったなら、中位に作り直すのです。小さければ、小さく作り直すのです。精神であれば、精神を作り直すのです。肉体であれば、肉体を作り直すのです。そうして要するに、豚たちの乳母が投げやりで、もしも豚たちが子供のデカルトを生かさずに貪り食ったなら、豚たちはソーセージの肉になるだけです。

(一九一一年二月三日)



証拠もなく告発していたジャーナリストに対して、イギリス王ジョージ五世の派手な裁判は、あちらの儀式で身に付けるかつらを被った頭に、私たちは想像力が働きました。そこには信仰のない儀式という驚くべき一つの事例があります。というのも確かにイギリス人は各々が、裁判官や弁護士はかつらを被るのが常識であると思っているからです。頭を剥き出しにして論じたり裁くことは、まずありません。そうです、かつらを被るのは、人もそれを被るからです。それ以上のことは何も考えていません。何故ネクタイをするのでしょうか。何故、服の袖や裾に何の役にも立たないボタンを縫い付けているのか、私たちにも覚えがあります。恐らく、イギリス人のかつらのように、全ての儀式を疑ってかかるのは賢明です。そうしてミサへ行く大部分の人々も、イギリスの裁判官がかつらを被るように疑問を抱くことがありません。

しかし、ミサには哲学者がいるように、恐らくかつらを被る哲学者もおります。理由がなければ必要性も成立しません。何故、偽造の髪なのでしょう。何故、白髪なのでしょう。

偽造の髪は、冷氣から首や耳や頭を保護します。それは、スカーフやお椀帽よりも人間の顔付きを変えないことでは勝っています。もっと美しくします。禿げ頭や毛の無い項は、顔付きを悪くします。年寄りや疲れた印象が強くなります。ところで政治の土台は恐らく老人たちの権威です。老衰に気付くことによって、すっかり弱められます。力と英知が一緒になればなりません。司法官にとっても、そこでかつらをつける義務が矍鑠とした老人の印象を与えます。そして自然の儘でも長髪の老人は、禿げ頭の老人よりも威信があります。公平というものに対して、かつらは法律的にも憚るものでないのが分かります。職務がそれを望んでいるように、かつらは誰でも平等にします。

かつらは白いです。何故なら、お分かりのように黒いかつらは疲れた顔が老けて見えますし、その風習は老人たちに支配されるのを隠すためでもあるからです。つまり、要するに若者の好戦的な感情を英知で隠すことでもあります。力のある者や支配者の性質の基本は、老衰することなく歳を取らねばならないのです。かつらは、自然を無視して風俗と結びついた英知と力の印です。

かつらには、他にも又良いことがあります。白粉やコルセットと同じ理由です。というのも若者が老人に変装しても、若者の気分は何も失っていませんし、それに反して歳を取る辛さもないからです。彼が上手にひげを剃りさえすれば、あなたは十年後も同じ彼を再び発見します。他の人々や彼自身のためには大きな利益です。何故なら二人の人間が変わって、時間的間隔後に後戻り出来ない時間の形跡を、一人がもう一人に見るのは悲しいことであるからです。もしも化粧が二人を同年齢に見せないなら、化粧は必要ありません。若者のかつらも、老人たちに対しての礼儀です。そのことはかつらが頭に被るだけのものではなく、もっと多くの英知を隠していることも理解させてくれています。

(一九一一年二月五日)

『戦争と平和』の中でトルストイは、強い印象を与える思想を述べています。それは、大衆の運動が決してリーダーたちに支配されないということです。侵略や戦闘も個人的な怒りや反動に支配されているわけではありません。そう言うことは出来ません。というのも、何故その騒乱が、一連の繋がった運動になって現れて来るのでしょうか。集団になった人間の運動は寧ろ、鳥たちの移動に似ていると言えますが、違っているのは季節と関係ないことです。恐らく私たちが未だ知らない別の周期と関係しているのです。例えば太陽の活動の変転があります。それは人間の気分を変えて乱暴なゲームに駆り立てて、ついにはゲームの中で最も乱暴なものへ駆り立てます。あるいは種族とか人種が同一の生活の中で、私たちが個人として毎日見ているような目覚めや眠りがあります。それらの独創性は、トルストイにはありません。一人ひとりが、難なく創り出すことが出来ます。歴史は予め決められている、という思想を力強く述べるに止めるのがトルストイです。個人は何も変えられない、と彼は言いたいのです。従って今は、多くの人々がヨーロッパの大戦争のことを考えています。そして多分、彼らには気圧計しかなく、それは避けられない人間の雷雨を前もって教えてくれるものです。私たちは十九世紀初頭に戦争の狂気を持ったので、恐らくドイツ人がその家族を持つのですが、この種の病気から何が生まれるのでしょうか。

この譬えは、まさしく宿命論は少しも満足させるものでないことを私に気付かせてくれます。というのも人は治療によって病気を治し、注意して事故を防ぐようになるからです。実際に私たちが理解しているのは、小さな事故が重大事故を引き起こしたり、止めたりすることです。ここに事故を起こして積み上げられた二台の列車があります。死者は百名です。その様なことが無いようにするには、きちんとした運転をすれば十分でした。しかし宿命論者は、この運転操作が事故を起こすのではない、とその前に書いたり言ったりしていたのです。そうです、そのように書かれていたのです。重大事故が起きたのですから、そのようにあなたは言うことが出来ます。もしも重大事故が避けられたとしたなら、運転のお陰で事故にしなかつたのである、と書いてあったとあなたは言います。それらは事故の後で書く予言のようなものなのです。要するに想像力の賭けです。現在を知ってあなたは過去に戻ります。避けられない未来によって把握するものを思い出すのです。そうです、今は避けられないのです。何故なら、それは存在しているからです。

もしも戦争が平和な時に、私たちが理解しているような人間の本質とは全く関係のないものであったなら、太陽や惑星の周期に結びつけた人間の気分の変化のようなものは十分に疑うことが出来ます。それに反して意志や思想は、大潮とか地震とか暴風雨に対して最早動じません。しかし、現実はそのではありません。現在の私たちのように平和を望む国民も、翌日になれば好戦的になります。長い間に多くのことが変わらなくても、運動を模倣したり、怒りの伝染、突然の状況の変化、そこから生じる新しい快樂、忽ちにして取り憑かれた新しい習慣によって、好戦的になります。もしも戦争が始まったなら、長く続きます。しかし、その始めは些細な原因が沢山になるからです。つまりその一部には、あなたも私もおります。取分けその上には、私たちの世論があります。それというのも宿命論者は、人々がそれを信じるや否や、宿命論者自身が証明さ

れたことになるからです。戦争は決して意志によるものではないという考えは、まさしく意志を無視して行われることとなります。人は祈るや否や、神が現れるのです。

(一九一一年二月八日)

野生のことが話されると、私たち人間よりも動物の野生の方を信じるのは軽率です。又は旅行者たちが信じていることを語っても、私は疑ってかかります。一人ひとりが信じるものとか信じないものを見抜くためには、先見の明を十分に持たなければなりません。一番良く知っていることを話す時もそうです。しかし、単に屢々間違っただけの言葉を付け加えて、手振り身振りから旅行者たちは判断します。それによって、社会学者たちは不条理な宗教を私たちに提示します。旅行者たちの話を何も変えないで報告していたなら、学問としてはそれで十分であると彼らは屢々考えます。

ところで私はパタゴニア地方の社会学者を考えたいのですが、彼はフランスに来てパタゴニア人の話について書いて仕事をしています。このパタゴニア人は奇妙なことを幾つも見て来ました。私はミサや礼拝式や偶像や香を強調しているのではありません。しかしながら、そのパタゴニア人は立像そのものを讃辞するが如く、全ての儀式に素直に参加する多くの人々に一人のカトリック信者もいない、と言って人は非常にびっくりします。「ここは私たちの家のようなものである」と彼は言います。しかし実際には、彼が可能なことを自由に考えさせています。その時の彼は、死者の精神が石像に隠されている、と私たちが信じているのを肝に銘じて書き留めます。彼が方々で見たそれらの石像は、その考えを明確にしています。取分けある日、ある団体がそこに冠をかけたのを彼が見たとしても、祈りが無い訳ではありません。もっと正確に言うなら、彼がある開会式に出席したとしても、喝采の真つ最中にヴェールを取って正体を見せたとしても、途中で文章や言葉に驚かされる演説を聴いていたとしても、榮譽を受ける建築家とか彫刻家を最後には理解したとしても、それは彼の国の社会学者のために美しい教会参事室を用意する時なのです。もしもパタゴニアの社会学者たちが、我が国の社会学者たちと同じように動物のようであったなら、教会参事室に真実の言葉はありません。

彼が別の神を見付けていれば、私たちは間違いなく崇めます。セーブルのブルトユイユ別館には、白金イリジウムメートルの国際単位があります。恐らく嚴重に仕舞われて守られていますが、多分だんだんと好奇心の強い人には自由に見せるようになるでしょう。このパタゴニア人は全てのメートルの元祖となったこの原型に、嚴肅に回帰するのを目撃していただろうと思われまふ。彼は書いています、「メートルの名称が検討される時は、〈第一人者〉の墮落でしかなく、全ての神々を支配する一つの神が彼らにはおります。そしてこの神は奇妙な形をした金属の棒で、恐らく神とか三人の高位聖職者を除いて、誰にもそれに触れる権利がありませんが、既にそれだけで大変に珍しいことなのです。そしてこの神は早くもこの世の大部分を支配し、直ぐにでも全世界の人々に崇められるのは確かです」。そしてメートルは、彼の国のオーヌとかトワーズの長さの単位に似ていると彼が理解する時、既に私たちを無視するようになれば、多くの場合メートルを使えば大変に不便ですが、特売場では一メートルに折りたたんで売られています。というのも出来る限り変化が少ない数量原基の有用性を理解するには、十分に精通していなければならないからです。同様に〈原型〉にまつわるこれらの莊嚴な話には、より多くの隠された有

用性がありました。その目的は国際委員会によって公に命名されなければなりませんでした。そこから儀式は全てが礼拝の様相を呈していました。しかしパタゴニア人たちの儀式は、葡萄酒を禁酒にすることや洗淨（1）や割礼の代わりであるのを見抜いているように、それ以上の隠された有用性はないということをあなたは確信しているのでしょうか。ジャン＝ジャック・ルソーは魔法使いと見做しました。何故ならバケツの中に隠したランプによって星図をその下に照らすからです。人は作りたかったものを少しも理解していませんでした。そして全ての魔法は恐らく、嘗て他人の心の裡を余りに容易に推測している愚かさでしかありません。

（一九一一年二月九日）

（1）洗淨とは、ミサで司祭が指に葡萄酒と水を注いで清めることである。

（第三巻・完）

一ノルマンディー人のプロポ III (完)

【2014年6月号】

<http://p.booklog.jp/book/85232>

著者：アラン (翻訳：高村昌憲)

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85232>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85232>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ